

産業組織論 第06回

外部性

外部性

外部性: ある経済主体の行動が市場を通すことなく他の経済主体に影響を及ぼすこと。

例として、ガソリンの消費を考えてみる。

- 自動車を走らせるためにガソリンを購入・・・ガソリンと引き替えにスタンドにお金を払っている
- 自動車を走らせることで排気ガス(負の効用を与える財)を放出・・・排気ガスを吸ってしまう人にお金を払っていない ← 市場を通していない!

外部性の分類

- 正の外部性(外部経済): 良い影響の場合
 - 近くに駅ができると、その周辺に新しい店ができて買い物が便利になる。
 - 近所の犬がかわいい(=効用の増加)
 - 教育水準の向上。
 - 予防接種。
 - 近くに花畑があると、養蜂業者は「〇〇の花の蜜からできた蜂蜜」という商品を生産できる。また、花が受粉しやすくなることで、それが果樹園なら生産量が増加する。

外部性の分類

- 負の外部性（外部不経済）：悪影響の場合
 - 近くに駅ができると、人や車が増えて混雑するため騒音や排ガスに悩まされる。
 - 近所の犬が散歩中に威嚇してくる（＝効用減）
 - 大気や水質の汚染。

外部性と社会的余剰

外部性がない場合には

- 市場需要曲線: 社会的な限界便益(財の消費によってどれだけ効用が増加しているか)を表す
- 市場供給曲線: 社会的限界費用(生産するためどれだけ費用がかかるか)を表す

だったのが、外部性が存在することで乖離してしまう(市場取引を伴わない分はカウントされない)。

外部性と社会的余剰

例えば、生産による公害（負の外部性）があるときには、公害による迷惑分だけ社会的には費用が余計かかっている（効用減）。このため、社会的限界費用は供給曲線（生産者が認識する費用だけを表す）の上方に位置する。



需要曲線（＝社会的限界便益）との交点は左上に位置する＝市場均衡では社会的に最適な水準より過剰に生産されている。

外部性と社会的余剰

一般に、

- 正の外部性のときは過少生産・消費
- 負の外部性のときは過剰生産・消費

が起こる。どちらにしても、社会的余剰は最適な水準より小さい＝非効率。これを「市場の失敗」という。

外部性の解決

経済主体が外部性を考慮しないことが非効率の原因なので、考慮するようにさせれば良い。これを「(外部性の)内部化」という。

- 関連企業の合併
- 乖離分だけ課税・補助金(ピグー税)
- 当事者間の交渉による金銭的解決(コースの定理)
- 直接規制(排ガスの排出規制等)
- 排出権取引

公共財

以下の性質を持つものを「公共財」という。

- 非競合性：一つの財を複数の主体が同時に消費可能
 - 排除不可能性：対価を払わずに消費可能
- 一般には、政府によって供給される（が、TVの無料放送のように民間によって供給されるものもある）。

公共財の例：国防・法律・花火大会・空いている無料道路